



Title	「ひきこもり」についての理解と支援の新たな枠組みをめぐって：心理 - 社会的な視点からの探求〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	村澤, 和多里
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7024号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66145
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Watari_Murasawa_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（教育学） 氏名 村澤 和多里

審査担当者 主査 特任教授 間宮 正幸
副査 准教授 加藤 弘通
副査 准教授 川田 学
副査 教授 白井 利明 （大阪教育大学教育学部）

学位論文題名

「ひきこもり」についての理解と支援の新たな枠組みをめぐって
—心理・社会的な視点からの探求—

「ひきこもり」という現象は日本社会における焦眉の問題といえる。人間成長の大きな困難を有することから自立支援に資する研究が切に望まれている。

本論文は、時代の差し迫った要請があるなかで、「ひきこもり」の人々の支援に関わってきた著者が、調査的方法を用いた研究と自ら対応した事例研究を中心に論じたもので、新たな理解枠組みと支援枠組みの見解を提示している。精神保健医療化・心理学化を相対化する立場に立ち、「ひきこもり」という現象について個人の心理と社会制度とを共に議論の対象として社会・歴史的な文脈から論じている。その結果として、本論文は、今後の教育的支援や自立支援に大きな影響を与える可能性を有するに至っている。

論文は3部から構成されている。第1部では「ひきこもり」とはいかなる現象であるのか論じ、第2部では支援枠組みを検討し、第3部ではこれまでの議論を総括している。

序において、目的と方法が述べられ、第1章では、「心の問題としてのひきこもり」を批判的に総括する。そして、精神保健医療の概念を検討し、「回避的なシステムの形成」、「不安・恐怖の質的な変化」、「リスク管理の方略としての自己愛」という論点を見出し、これらが絡み合いながら「ひきこもり」という現象が生起し維持されていると考察する。

第2章は、社会・歴史的な現象として「ひきこもり」を捉えることを目的として、先行する現象である「不登校」との関係に焦点をあてて検討している。その結果、「ひきこもり」が、不登校という現象から切り離され、社会参加の問題として独立した概念として確立されていたことを確認している。

第3章は、「ひきこもり」に至るまでの経緯を検討し、第2章で論じた「不登校」「いじめ被害」との関連性について考察している。「いじめ被害」「不登校」「就労の失敗」の経験

が直線的に「ひきこもり」の原因になっているわけではなく、相互に絡み合うように作用しながら「ひきこもり」という状態に至ること、特に、実質的には「ひきこもり」状態でありながら表面的にはフリースクールや通信制高校に在籍しているという形で「ひきこもり」が見えなくなる過程があることを指摘し、これを「透明な排除」という概念で説明している。

第4章では、調査協力者の語りの内容を質的研究法(M - GTA)の方法を用いて分析している。その結果、劣等感にとらわれて過剰な自己コントロールに陥っていく「スティグマ化」のプロセスと、過去の傷つき体験(トラウマ)とそれがなかったら実現できたかもしれない空想的な自己像にとらわれていく「トラウマ化」のプロセスが見出され、「ひきこもり」から抜け出せなくなっていく心理的メカニズムを示している。

第5章では、著者自身の事例の研究により「スティグマ化」と「トラウマ化」の絡み合いからの脱却のプロセスを示している。自己の「異質性」をむきだしのまま体験させられるために生活世界の日常性を構築できなくなっている様を「社会的自明性の喪失」と呼び、他者との相補的な関係性を通して新たな自己が生成していくプロセスを確認している。

第6章は、著者が若者自立支援施設で行った「居場所づくり」プログラムによるグループアプローチの実践の分析である。バフチンの対話理論を参考に、同じ体験をしたもの同士の「腹話術」と呼べる発話形式が彼らの「同質性」の体験を活性化させていくこと、その中で「待つ—待たれる」といった相補的な関係性が体験され、「異質性」が「個性」として受け入れられていくことを見出している。

第7章では、若者支援政策を概観し、それらが新自由主義化の進行に伴う社会不安の解消策に偏ることを論じ、終章では「ひきこもり」は個人的な問題に還元できるものではないにもかかわらず、個人のリスク管理システムの問題としてみなしがちと述べて『自己コントロール』の社会化」「親密性のセーフティネット」などの支援枠組を提示している。

本論文の意義は、臨床経験による知見に加えて調査的方法によって「スティグマ化」と「トラウマ化」のプロセスとそこからの脱出へと至る自我の再形成の方法、再教育の方法を提示したことにより、新しい見解として評価できる。今後の課題として、「ひきこもり」の解明のために世界的な視野での社会・歴史的な人間の成長・発達の研究が望まれる。

本論文は、従来の「ひきこもり」に関する考え方から大きく方向を転換させる内容をはらんでおり、教育臨床心理学研究および支援方法の改善に大いに貢献すると評価できる。

よって著者は北海道大学博士(教育学)の学位を授与される資格があるものと認める。